光信公ゆかりの地紀行6

青森県弘前市　～津軽藩誕生の地～

光信公
津軽藩始祖
入部530年

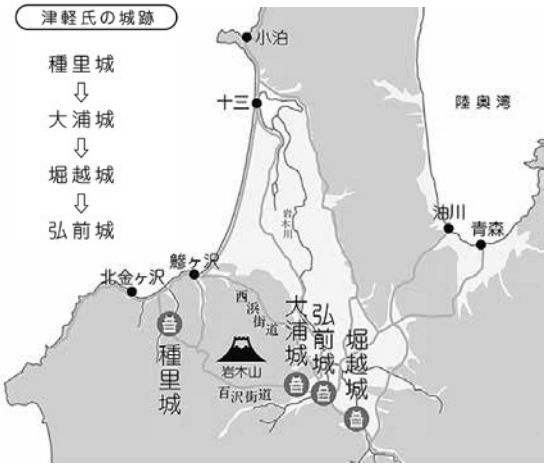
大永6年（1526）10月8日、大浦光信は鰺ヶ沢町種里城で67歳の生涯を閉じます。南部氏方の武将として、岩手県久慈からはるばる種里の地に赴き、強敵・安東氏との攻防の最前線に立ち続けた波乱の生涯でした。

さて光信の没後、その後継者たちは、戦国の世をどのように生き抜いていったのでしょうか。今回は、大浦氏のその後をたどって、津軽藩誕生の地となった青森県弘前市を訪れます。

■2代盛信と大浦城

文亀2年（1502）、光信は種里城に次ぐ第二の拠点として大浦城を築き、嫡男・盛信に与えます。大浦城は、岩木山の東麓に位置し、種里城と津軽平野を結ぶ街道の出入り口にあたる交通の要所を押さえた城でした。現在、城跡の大半は弘前市立津軽中学校となっていますが、付近には堀跡や土塁跡が明瞭に残っています。

盛信が2代目を継承してからは、この大浦城が種里城に代わって大浦氏の本拠地となります。3代政信、4代為則、5代為信まで大浦城を居城とし、その勢力は岩木山麓一帯から、いよいよ津軽平野に覇をとなえる時代を迎えたのでした。



大浦氏・津軽氏の城の移り変わり

大浦城（弘前市）

■5代為信と堀越城

永禄10年（1567）、大浦氏4代目の為則は、死に臨んで一族の為信を娘戌姫の婿とし、5代目の家督を継がせました。やがて為信は、南部本家（三戸南部氏）の家督争いに乗じて、南部氏の城を次々と攻略。戦国の風雲児として津軽統一を果たすこととなります。光信の種里入部から約100年後の天正18年（1590）には、豊臣秀吉から所領を安堵され、ここに津軽藩が誕生しました。

津軽藩初代藩主となった為信は、姓も津軽氏に改めて「津軽為信」を名のり、文禄3年（1594）に大浦城から堀越城へと本拠地を移します。堀越城は、為信が津軽支配の新たな政治的中心地とした城でした。現在、城跡は、弘前市によって全面的な公園整備が行われています。

堀越城（弘前市・国史跡）

■津軽氏歴代の城・弘前城

津軽氏が弘前城の築城に着手するのは、津軽為信が新たな町屋の地割りを行ったことに始まるとされます。為信の没後は、2代藩主となった信枚に引き継がれ、慶長16年（1611）には堀越城より本拠を移転。城下町弘前は、江戸時代約260年間にわたって津軽地方の中心地となりました。

実は、弘前市にある大浦氏・津軽氏の城（大浦城・堀越城・弘前城）と、鰺ヶ沢町の種里城は、岩木山の山頂をはさんでほぼ直線上に並んでいるのをご存じでしょうか。つまり、弘前側から岩木山を遥拝すると、ちょうどその裏側に種里城があるという位置関係です。

始祖光信から為信につながる津軽藩誕生の物語は、悠久の時を越えて、今も一本の柱のごとく、弘前市と鰺ヶ沢町の大地を貫いているかのような気がしてなりません。（町学芸員　中田）

弘前城（弘前市・国史跡）
岩木山の反対側が「発祥の地」である種里

津軽為信像
（弘前文化センター前）

光信公入部530年記念「津軽藩ゆかりの地ＰＲ展示会」開催中
場所：日本海拠点館　１階冬の広場（月・火曜日休館）　期間：10月31日(土)まで　9：00～17：00